



第4回

最後の入院

本人と家族の意思に沿って、伴う責任とともに

香

さんは94歳の父親を、長年かかっていた急性期病院で見送りました。看護師でアドバンス・ケア・プランニングに関心があり、両親の意思を聞いていたので「ここで実行しなきゃ！」と動いた、香さんの物語です。

*

亡くなった最後の入院は、インフルエンザの高熱がきっかけでした。入院すると、高齢者は「転倒防止のため」と歩かせない。食事は「誤嚥防止のため」と止めて点滴に。そして「静脈からの点滴では栄養が十分ではないから、胃ろうか高カロリー輸液どうですか」と主治医に聞かれました。

私は「父は意識がはっきりしているし、何とか口から食べられないですかね」。しかし医師は「それは難しいでしょう」と賛成しません。でも意向を汲んでくれて言語聴覚士が嚥下訓練を始めると、意外に飲み込めるんです。それで父に「胃ろうや経鼻チューブしたい？」って聞いたら「どちらもない。口から食べられるんだったら食べたい」と明確でした。

弱音を言わなかった父が、衰えを自覚してぼろっと「これ以上生きていてもな……」と漏らすようになり、「無理に承らえたくない、静かな最期」を望んでいると分かっていたし、家族も尊重したかった。「父の最善を考えると、胃ろうや経管栄養はしないで、少しでも食べられるように嚥下訓練はしていただき、それで誤嚥したり肺炎になっても、仕方ないと思っています」と、医師にもナースにも何度も伝えました。最後はよく分かってくれて、医療処置は少なく、点滴は水分補給だけ。食事も経口で食事介助。「それが一番いいでしょうね」と、になりました。

家族として私もなるべく病院に行き、食事介助をしました。すると意外や意外、きちんと体を起こ

すと、多少むせてもペースト状のものを食べられ、本人も生き生きして……私は「これで誤嚥したとしても、それはそれでいい」と思いました。

小康状態が続いて、父が住んでいたケア付き住宅の看護師と「これだけ食べられるなら来週退院」という話をしたほどでした。

そうこうするうち、やはり誤嚥していたのか痰が増えて呼吸状態が悪くなり、そこからは早く、眠っている時間が長くなり、ものの数日でした。

亡くなった日もいつも通りお昼に病室に行って「どう、お父さん、つらくない？」って聞くと、うつらうつらしながら「ああ大丈夫だ」と答えました。その2時間後くらいに「様子が変わりました」と呼ばれ、着いたときは、呼吸はしていなかったん

ですが穏やかで、「寝ているの？」っていう感じでした。数日前まで食べていましたし、本人が「つらいとか苦しい」と言う場面は一度も見なかったです。

こういう日々が送れたのはやはり、本人と家族の意思を明確にし、医療者に伝えたからですね。

*

その後数日は、病院の霊安室に預かっていただき、そこから出棺しました。親族が集まり、前にお世話になった医師や看護師も来て父が好きだったお酒とおせんべいをお花と一緒に入れて。喜んでいるでしょう。父が暮らしていた施設のスタッフも来てくれて「いつも通りの表情ね」と思い出話をできたのも感動的でした。父も身近な人に見送られていい最期だったと思います。看取りは家族の心に長きにわたって残るので、とても大事だと思います。

むらかみきみこ◎ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで、国内各地、海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線—医療関係者が患者・家族になってわかったこと』(医学書院)、『納得の老後—日欧在宅ケア探訪』(岩波新書)。



さまざまな人生最後の光景
「最後の退院」はケア付き住宅でのお花見(撮影:佐藤元美)